

西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第31集

市内遺跡発掘調査概要報告書VII

西都原地区遺跡
日向国分寺跡

2002

宮崎県西都市教育委員会



西都原地区遺跡全景（上空より）



日向国分寺跡C区第1トレンチ遺構掘削状況（南東より）

序

西都市教育委員会では、市内遺跡発掘調査として平成7年度より日向国分寺跡確認調査、平成10年度より西都原地区遺跡確認調査を実施しております。本書は、それら遺跡調査の概要報告書であります。

今回の調査で西都原地区遺跡につきましては、縄文時代早期の集石遺構をはじめ弥生時代の住居跡などを検出することができました。

また、日向国分寺跡では、昨年度までの調査で主要伽藍に取り付く東西門、南東側に塔跡、南側に南門が想定され、今年度は平成元年度に僧坊跡と推定されている一帯と寺域の確認を目的に調査を行いました。寺域端に関しては宅地化などの理由から調査ができず明確にできませんでしたが、僧坊跡確認地域に関しては平成元年度の宮崎県教育委員会の調査成果以外に南側に新たな建物跡が推定されるなど大きな成果を得ております。

これら調査により得られた成果は、西都市の古代史解明のためには極めて重要なものであります。

本報告が考古学研究のみでなく、社会教育や学校教育の面にも広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と認識を深めるための資料となれば幸いと存じます。

なお、調査にあたってご指導・ご協力いただいた調査指導の先生方、宮崎県教育庁文化課をはじめ、発掘調査・整理作業にたずさわっていただいた方々、並びに地元の方々に心から感謝申し上げます。

平成14年3月29日

西都市教育委員会

教育長 菊 池 彬 文

例　　言

1. 本書は、西都市教育委員会が国庫補助を請け、平成13年度実施した市内遺跡発掘調査の概要報告書である。
2. 平成13年度の確認調査は、西都市大字二宅字西都原に所在する西都原地区遺跡内(たばこ耕作に伴う大地返し地点)、西都市大字三宅字国分に所在する日向国分寺跡の3地区を対象に行った。調査は平成13年8月22日から平成14年3月末まで行った。
3. 発掘調査は、西都市教育委員会が主体となり実施した。
4. 調査及び図面作成等については養方政幾・笠瀬明宏が担当した。
5. 本書の執筆・編集は、第Ⅰ・Ⅱ章は養方政幾・笠瀬明宏、第Ⅲ章は養方政幾、第Ⅳ・Ⅴ章は笠瀬明宏が担当した。
6. 本書に使用した方位は、Fig.1・2・7が平面直角座標系第Ⅱ座標系であり、Fig.3・4は磁北である。この地点の磁北は真北より $5^{\circ} 25'$ 西偏している。
7. 本書に使用した標高は海拔絶対高である。
8. 報告書に用いた色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局ほか監修の『新版標準七色帳』に準拠した。

目 次

第Ⅰ章 序説

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の体制	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境	2
第Ⅲ章 西都原地区遺跡の調査	4
第1節 調査区の設定と概要	4
第2節 調査の記録	6
第3節 小結	11
第Ⅳ章 日向国分寺跡の調査	12
第1節 これまでの調査結果と概要	12
第2節 遺構と遺物	14
第3節 小結	17
第Ⅴ章 日向国分寺跡出土軒先瓦の分類	18
第1節 日向国分寺古瓦の研究史	18
第2節 分類私論	18
第3節 日向国分寺跡出土軒先瓦のセット関係	23
第4節 まとめと今後の課題	26

報告書抄録

挿図目次

- Fig. 1 西都原古墳群周辺位置図
- Fig. 2 西都原地区遺跡調査地点位置図(1/10,000)
- Fig. 3 第60地点住居跡実測図(1/40)
- Fig. 4 第62地点住居跡実測図(1/40)
- Fig. 5 第60地点出土遺物実測図(1/2・1/4)
- Fig. 6 第62地点出土遺物実測図(1/2)
- Fig. 7 日向国分寺跡現況平面及びトレンド配置図(1/1,000)
- Fig. 8 日向国分寺跡第7次出土遺物実測図(1/3)
- Fig. 9 日向国分寺跡出土軒丸瓦分類(1/5)
- Fig.10 日向国分寺跡出土軒平瓦分類(1/5)
- Fig.11 日向国分寺跡軒先瓦のセット関係(1/5)
- Fig.12 日向国分寺跡軒先瓦の型式変遷(1/10)

表 目 次

- Tab. 1 日向国分寺跡軒先瓦出土箇所一覧

図版目次

巻頭 PL.1 西都原地区遺跡全景(上空より)

PL.2 日向国分寺跡C区第1トレンチ遺構掘削状況(南東より)

PL.1 －西都原地区遺跡－

1. 西都原地区遺跡遠景
2. トレンチ調査状況(第68地点)
3. アカホヤ火山灰下層検出状況

PL.2 －西都原地区遺跡－

4. 西都原遺跡近景
5. トレンチ調査状況(第58地点)
6. トレンチ調査状況(第62地点)

PL.3 －西都原地区遺跡－

7. トレンチ調査状況(第65地点)
8. 遺構検出状況(第65地点)

PL.4 －西都原地区遺跡－

9. 住居跡検出状況①(第60地点)
10. 住居跡検出状況②(第60地点)
11. 住居跡検出状況③(第62地点)

PL.5 －西都原地区遺跡－

12. 西都原地区遺跡出土遺物

PL.6 －日向国分寺跡第7次－

13. A区第1トレンチ遺構検出状況(南より)
14. A区第2トレンチ遺構検出状況(北東より)
15. A区第4トレンチ遺構検出状況(東より)
16. B区第2トレンチ遺構検出状況(東より)
17. B区第3トレンチ遺物出土状況(東より)

PL.7 －日向国分寺跡第7次－

18. B区第3トレンチ完掘状況(東より)
19. C区第1トレンチ遺構検出状況(南東より)
20. C区第1トレンチ遺構検出状況(北西より)
21. C区第3トレンチ遺構検出状況(西より)
22. C区第3トレンチ東側溝掘削状況(南東より)

PL.8 －日向国分寺跡第7次－

23. 日向国分寺跡第7次出土遺物

第Ⅰ章 序 説

第1節 調査に至る経緯

西都原地区遺跡の発掘調査については、たばこ耕作の天地返しに伴い実施したものであり、平成10年度からの継続事業である。このことについては、天地返しの地下遺構に与える影響は大きく、遺跡の消滅が懸念されることから、たばこ耕作組合と協議を重ねてきたが、生産者の生活権等を考慮すると現状保存が困難であると判断し、重要な遺構・遺物が検出された場合には現状保存を前提とした協議をすることを条件に本年度も調査を実施することとなった。

調査は、新たに天地返しが行われる予定になっている12箇所(第57～68地点)の確認調査であり、調査期間としては、たばこの準備及び他耕作物との関係で平成13年8月～同年12月までの間で調整しながら進めることになった。

一方、日向国分寺跡の調査は、西都市教育委員会が調査を始める以前に3度調査が行われた。

まず、昭和23(1948)年に駒井和愛教授を団長とした、主として早稲田大学で組織された日向考古調査団によって行われた。^①その後、昭和36(1961)年及び平成元年度には宮崎県教育委員会によって^②発掘調査が実施されたが、僧坊跡ないし食堂跡(平成元年度)^③と推定される2時期の掘立柱建物以外には、その主要伽藍配置について明確にされていない。

当地域は、当時の報告書の周辺写真と現在では寺域内外の宅地化が著しく、畠地や空き地の確保も困難となり、伽藍配置の確認が急務である。このことから、西都市教育委員会が平成7年度より^{④～⑥}主要伽藍配置及び寺域の確認調査を実施してきた。本年度も、この継続として調査を行った。

※(註)は第Ⅱ章参照

第2節 調査の体制

調査主体	教 育 長	菊 池 彰 文
	文 化 課 長	阿 万 定 治
	同 补 佐	奥 野 拓 美
	同 主 事	鹿 嶋 修 一
	同 主事補	津 曲 大 祐

調査員	文 化 課 係 長	蓑 方 政 幾
	同 主 事	釜 潤 明 宏

調査指導　　日 高 正 晴(西都原古墳研究所長)

第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境

西都市街地の西方、標高50～80mには通称西都原と呼ばれる台地がある。台地上には前期古墳を含む前方後円墳30基・方墳1基・円墳278基の大小古墳で構成された特別史跡・西都原古墳群が所在する。また、南九州独自の墓制である地下式横穴墓も現在までに12基、溝道が深く掘り込まれ地下式横穴墓と折衷型とされるタイプの酒元ノ上横穴墓群も確認されている。

この西都原台地は、九州山地から南南東に向かって舌状に細長く延びた洪積世台地で、その南端には產土神の三宅神社が創建している。その神社地域から急坂を下ると、上尾筋・下尾筋遺跡の所在する標高30m程の中間台地になり、さらに下ると標高12m程の沖積平野へと至る。

西都原地区遺跡は西都原台地状に所在し、寺原・丸山・原口・西都原遺跡の4遺跡を総称した呼称である。原口遺跡は台地南側、寺原遺跡は原口遺跡の北側に位置し、丸山遺跡は台地北側、西都原遺跡は台地中央部の東側に位置している。これら遺跡内からは、丸山遺跡で縄文時代早期の焼磧群、原口第2遺跡からは古墳時代後期の竪穴式住居跡2軒、寺原第1・4遺跡からは弥生時代終末の竪穴式住居跡3軒などが確認されている。また、同台地北東端の新立遺跡では、弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴式住居跡20軒などが検出されている。

一方、日向国分寺跡は、西都原台地と西都市街地の中間台地に位置し、北・東側は断崖、西側は西都原台地、南側は谷に囲まれている。また、北方600m程にある妻高等学校敷地内には同尼寺跡も保存されており、本地域は古代にも重要な地域とされ、今もなお多くの遺跡が遺存している。

また、国分両寺は国府の近くに置かれるのが全国的な通例であり、近年、国分寺跡から北東に直線距離で約1.2kmの寺崎・法元地区に、宮崎県教育委員会の調査により日向国衙跡が確定された。

このように、西都原台地上はもちろん、日向国分寺跡を含む中間台地は古代日向国の拠点として栄えた歴史的環境をもつ地域であったと思われる。

(註)

- (1)松本 昭『宮崎県日向国分寺』『日本考古学年報』I 日本考古学協会編纂 1949
- (2)宮崎県教育委員会「日向国分寺址」『日向遺跡総合調査報告』第3号 1963
- (3) " " 『国衙・郡衙・古寺跡等遺跡詳細分布調査報告』III 1991
- (4)西都市教育委員会「遺跡所在確認調査に伴う市内遺跡発掘調査概要報告書I」
『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第23集 1996
- (5) " " 『市内遺跡発掘調査概要報告書II』『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第25集 1997
- (6) " " 『市内遺跡発掘調査概要報告書III』『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第27集 1998
- (7) " " 『市内遺跡発掘調査概要報告書IV』『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第28集 1999
- (8) " " 『市内遺跡発掘調査概要報告書V』『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第29集 2000
- (9) " " 『市内遺跡発掘調査概要報告書VI』『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第30集 2001
- (10)宮崎県・西都市教育委員会「西都原地区遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第22集 1996
- (11) " " 『新立遺跡』『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第18集 1992
- (12)平成12年3月に宮崎県教育委員会より国衙跡と確定された。現在、国指定申請に向かっている。
- (13)第V章に関しては、平成13年11月10日に行われた西日本古瓦研究会の発表資料を一部抜粋及び訂正した。



番号～地調査点

1. 西都原古墳群
2. 御陵墓（男狭穗塚・女狭穗塚）
3. 丸山遺跡
4. 西都原遺跡
5. 寺原遺跡（西都原地区遺跡）
6. 新立遺跡
7. 原口第2遺跡
8. 日向國分寺跡
9. 日向國分尼寺跡
10. 酒元遺跡
11. 寺崎遺跡（日向國衙跡）

Fig. 1 日向國分寺周辺位置図

第Ⅲ章 西都原地区遺跡の調査

第1節 調査区の設定と概要

西都原地区遺跡については、これまでに、圃場整備をはじめ道路拡張等に伴う発掘調査が行われているが、なかでも、平成5年度から平成7年度まで実施された圃場整備に伴う発掘調査は、調査面積が90,000m²にも及ぶ大規模なもので、道路及び削平によって地下遺構の保存が困難な部分について行われた。

この調査では、縄文時代早期の集石遺構及び焼穀群をはじめ、弥生時代中期の竪穴式住居跡や古墳時代前期の竪穴式住居跡群、さらには、横穴墓と地下式横穴墓との折衷形として注目された古墳時代後期の横穴墓などが検出された。位置的には、そのほとんどが西都原台地縁辺部であり、台地中央部からは弥生時代の竪穴式住居跡などが検出されているものの、密度的にはかなり低いことが判明している。また、古墳の築造に関連した人々の遺構が確認されなかったことから、台地上特に陵墓の東側を中心とした地域は古墳を築造する特別な空間、いわゆる聖域として認識していたものと想定される。なお、横穴墓については、現在、県文化課が主体となって進められている「地方拠点史跡等総合整備事業」(歴史ロマン再生事業)のなかで保存・活用されることとなり、「西都原古墳群遺構保存覆屋」が建設され、現在一般公開されている。

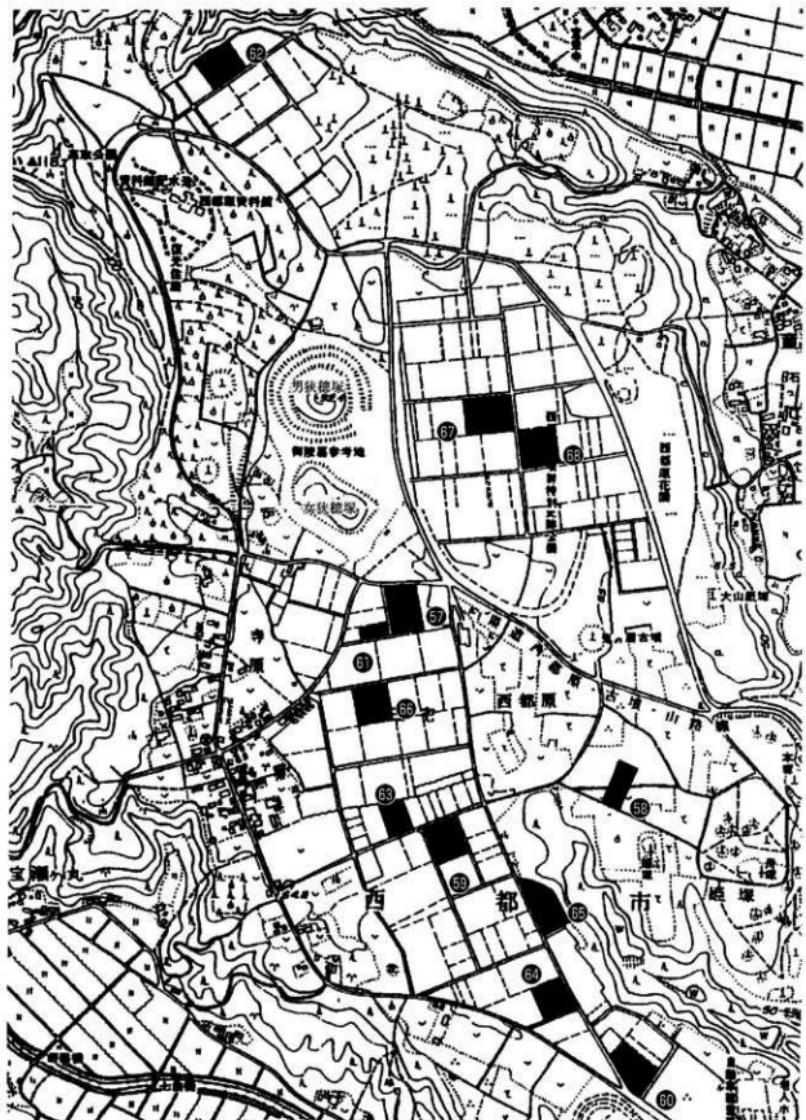
このような中、本年度についても、これまでと同様に天地返しが予定されている陵墓の西側及び南側、そして、県立西都原資料館の東側の圃場整備された畑地を中心にトレンチを設定して発掘(確認)調査を行った。

調査は、アカホヤ火山灰層を中心に行つたが、アカホヤ火山灰層の遺存率は全体の2/3程度で良好であった。調査地点は、12地点(第57地点～68地点)で、調査対象区域の面積も約60,500m²と広範囲で苦慮したが、幅2mのトレンチを6～10m間隔に設定して遺構・遺物の遺存状況等の確認を行つた。そして、遺構・遺物が確認された場合には、トレンチを状況に合わせて拡大して範囲等の確認を行つた。

また、アカホヤ火山灰下層の文化層については、トレンチ内に幅2m・長さ2m程の小トレンチを設定して確認を行つた。

調査の結果、第60地点から弥生時代中期末～後期初頭頃、第62地点から弥生時代後期の竪穴式住居跡をはじめ、第65地点から縄文時代早期の焼穀群や時代は不明であるが竪穴式住居跡2軒等を検出した。このように、少しずつではあるが西都原の謎を解く資料が得られ、大きな成果を上げることができた。

なお、第60地点は平成5～6年度実施した圃場整備(県営農村基盤総合整備パイロット事業(尾鈴地区西都原工区))の際に竪穴式住居跡の一角を検出したところ(2号小道路)と隣接している。また、第65地点も、第60地点同様圃場整備したときに集石遺構7基等を検出したところ(E区)であるが、本地点については、今回新たに竪穴式住居跡を2軒検出し、さらに、焼穀群も検出したことにより遺跡の広がりが確認できたことから、地権者と協議を行つた結果、来年度に本調査をすることで合意に至つた。



番号～調査地点

0 100 500m

Fig. 2 西都原地区遺跡調査地点位置図 (1/10,000)

第2節. 調査の記録

1 造構と遺物

〈焼礫群〉

焼礫群は、第62地点と第65地点から検出されている。第62地点は東側のわずかな部分であったことから、全体の約1/4程度検出した第65地点のみ来年度に本調査を実施することになった。

なお、この第65地点は、圃場整備(平成5~7年度県営農村基盤総合整備パイロット事業)に伴い実施した発掘調査において集石造構及び焼礫群を検出した地点(E区)と同畑内で、その際、集石造構7基を確認している。

〈竪穴式住居跡〉

竪穴式住居跡は、広範囲の面積の割には少なく、第60地点から1軒、第62地点から1軒、第65地点から2軒の計4軒を検出した。

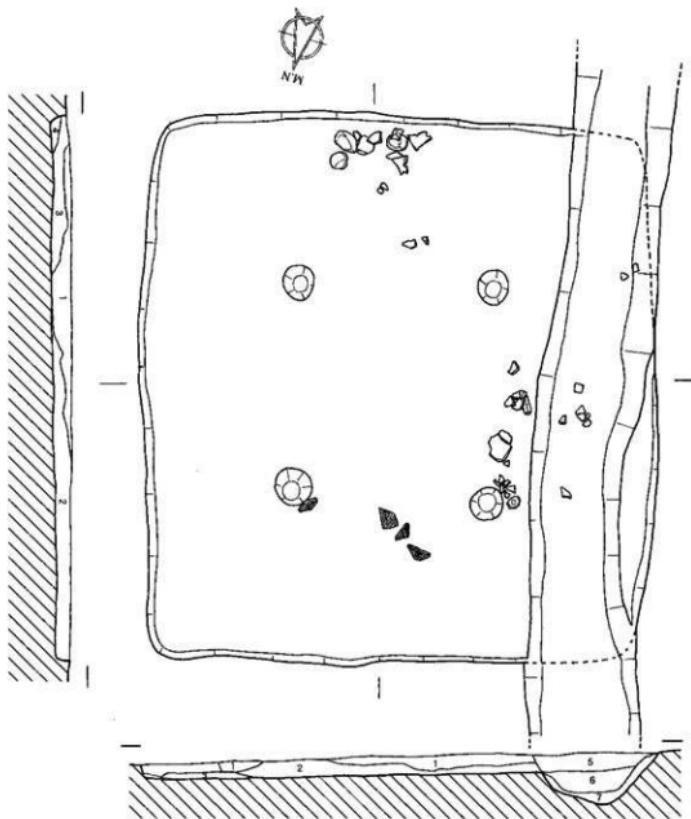
第60地点の竪穴式住居跡(Fig.3)は、西都原台地南部で、西都原運動公園の北東50mに位置する畠地である。長軸4.48m・短軸4.20mの規模を有する方形プランのものであるが、西側を南北に構状造構に切られている。検出面からの深さ0.16m前後を計り、床面は、平坦で、主柱は4本である。

遺物は、少ないが斐形土器や器台などが出上している。斐形土器は口縁部が「く」字状に外反しているもの(Fig.5.①・②)、あげ底のもの(Fig.5.④)も含まれている。器台(PL4)は口縁部・体部・裾部が曲線的にスムースに移行するタイプのものであると推定される。上下2段に並行して直径1.7cm程の円孔を穿っているが、体部から裾部のみ遺存しており、口縁部がないのが非常に残念である。時期的には、出土土器の特徴から弥生時代後期頃のものであると推定される。

第62地点の竪穴式住居跡(Fig.4)は、西都原台地の北端部で、圃場整備の際に集石造構や弥生時代中期末から後期初頭の土器溜りを検出(2号小道路)した地点と隣接している。長軸3.36m・短軸3.30mの規模を有する方形プランのもので、検出面からの深さ0.55mを計る。床面は平坦で、主柱は2本である。なお、圃場整備の際に竪穴式住居跡の一角を検出しているが、図面や出土遺物等を照合した結果、その竪穴式住居跡と同一のものであることが判明した。

遺物は、刻目突帯を有する下城式系の斐形土器(Fig.6①)や口縁部が「く」字状に外反し、口唇部に刻目が施された(Fig.6②)、鋤先状口縁部か頸部からゆるやかに外反する斐形土器(Fig.6③)などが出土している。この中で、下城式系の斐形土器のものは圃場整備の際に検出した竪穴式住居跡からのものと全く同じ特徴を有している。時期は出土土器の特徴から弥生時代中期末~後期初頭頃と推定される。

第65地点の竪穴式住居跡は、1号住居跡が一辺5.4m、2号住居跡が長軸5.2m・短軸4.1mの規模を有する方形プランのものであるが、本地点については焼礫群も広範囲に検出していることから、地権者と協議を行い、来年度本調査をすることで合意に至った。よって、今回は造構の平面プランを検出したのみで調査を終了した。



- | | |
|-----------------|------------------|
| 1～黒色土 7.5YR2/1 | 5～黒色上 10YR1.7/1 |
| 2～黒褐色土 7.5YR3/1 | キメ細かく、少し粘質 |
| アカホヤブロック少量混入 | |
| 3～黒褐色土 7.5YR2/2 | 6～黒色上 7.5YR1.7/1 |
| アカホヤブロック多量混入 | 上層より少し明るいが、キメは荒い |
| 4～黒褐色土 7.5YR3/1 | 7～黒褐色上 10YR3/1 |
| | アカホヤブロック混入 |

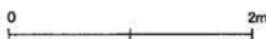


Fig. 3 第60地点住居跡実測図 (1/40)

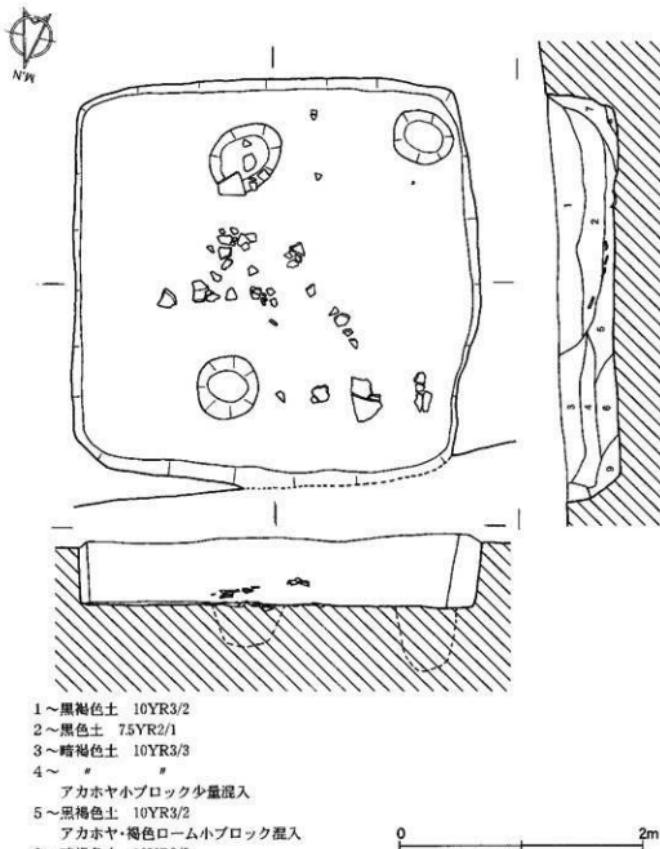


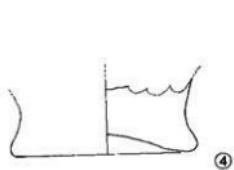
Fig. 4 第62地点住居跡実測図 (1/40)



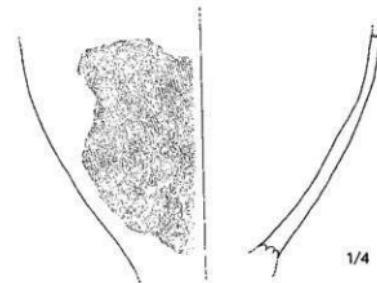
①



②

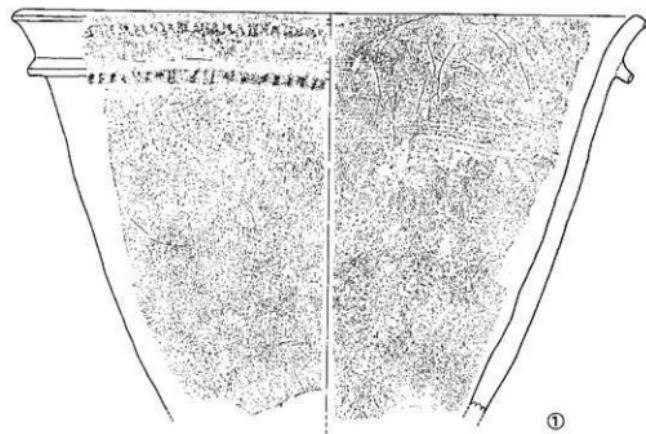


④

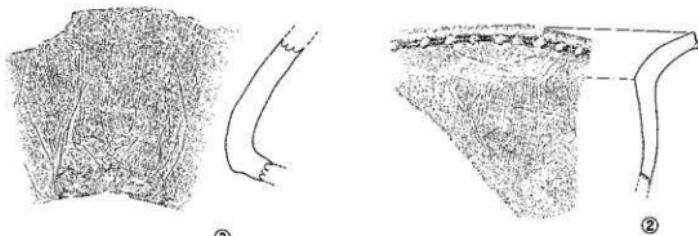


③

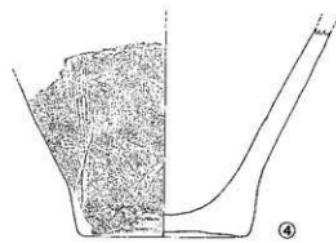
Fig. 5 第60地点出土遺物実測図 (1/2、1/4)



①



②



④

0 10cm

Fig. 6 第62地点出土遺物実測図 (1/2)

第3節 小結

西都原台地では、これまでに、童子丸(新立遺跡)⁽¹⁾墓地造成に伴う発掘調査をはじめ、圃場整備等に伴い行った大規模な発掘調査(西都原地区遺跡)⁽²⁾や昨年度たばこ耕作の天地返しに伴い実施した確認調査(西都原地区遺跡)によって、様々なことが判明してきた。

新立遺跡では、縄文時代早期の集石遺跡や古墳時代初頭頃の竪穴式住居跡、西都原地区遺跡では縄文時代早期の集石遺構をはじめ、弥生時代中期から古墳時代初め頃の竪穴式住居跡や横穴墓群、さらには、古墳時代以降中世までの掘立柱建物跡を検出した。

また、圃場整備に伴う調査では低丘陵地に横穴墓が検出された。この横穴墓は、西都原台地上に偏在する地下式横穴墓の特徴を併せ持っていることで、地下式横穴墓と横穴墓の折衷形という墓制を考えるうえでは非常に貴重な遺構として注目された。

ところで、今回の調査ではわずかではあるが、焼窯群や竪穴式住居跡4軒等を検出した。この中で、第60地点のものは弥生時代後期、第62地点のものは弥生時代中期末～後期初頭頃のものと推定されるが、周辺からはこれまでに圃場整備や道路拡張工事等によって中期から後期にかけて竪穴住居跡や土器溜りなど様々な遺構が確認されており、同時代における集落の様相が徐々に解明されつつある。

このように、今回及びこれまでの調査によって、各時代における遺跡の分布状況や特徴など少しずつではあるが解明されてきている。遺構の分布状況としては、縄文時代早期の集石遺構は西都原台地北東端部の周辺地域において広がりをみせている。弥生時代の竪穴式住居跡は北部・中央部・南部にまたがって分布しているが遺構密度は薄い。古墳時代の竪穴式住居跡は北西端部と西側中央部の寺原集落周辺一帯に分布しているが、全体的に遺構密度が非常に高くなっている。かなりの人たちが古墳時代になると流入し、生活環境が変化したと同時に繁栄してきたことがこのことからも理解できる。

しかし、まだまだ未解明な部分が多いというのも現状であり、今後実施される調査等によって、さらに検討を加えていかなければならないと考える。

註

- (1) 西都市教育委員会「新立遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第18集 1992
- (2) 西都市教育委員会「西都原地区遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第22集 1996

第IV章 日向国分寺跡の調査

第1節 これまでの調査結果と概要

日向国分寺跡については、前記のとおり、昭和23年に駒井和愛を団長とする日向考古調査団が、また、昭和36年及び平成元年度には宮崎県教育委員会が確認調査を実施している。昭和23年の調査地点については詳細にできないが、昭和36年の調査は旧五智堂及びその南側を中心に、平成元年度には寺域の北側にある部分(中央東西道路の北側)の確認調査が実施されている。

昭和23・36年の調査では、伽藍配置については明確にされていないが、平成元年度の宮崎県教育委員会による調査では僧房跡ないし食堂跡と想定される2時期の掘立柱建物跡が確認された。

西都市教育委員会による調査は、平成7年度から実施しており今年度で第7次になる。

平成7・8年度の調査では、金堂の掘込事業跡と推定される遺構や回廊跡、さらに、その回廊の外側に巡らされていたと推定される溝状造構が検出されている。これらは、いずれも主要伽藍配置に関する遺構で今まで明確にできなかった主要伽藍配置の一部を特定することができた。また、II地点第1・3トレンチの溝状造構は回廊の外側に巡らされていたものと推定され、溝状造構の東辺が確定された。

平成9年度は、これらの調査結果を踏まえ、主要伽藍西側と北側溝の確認、主要伽藍内及び周辺の遺構等の有無確認を目的として調査を行った。調査の結果、A区から計5本の柱穴が検出され、主要伽藍に取り付くと予想される西門の存在が確認できた。また、西門北側からは南北に延びる溝状造構(SE002)が検出され、主要伽藍を取り囲むように巡っていることが予想された。

平成10年度の調査は、西門から南北に延びる溝状造構の範囲確認、主要伽藍配閣南東側の回廊跡(推定)の確定を目的に行なった。調査の結果、A区で以前確認されていた並行したピット列が回廊跡と確定され、最低でも3回の建て替えが判明した。また、主要伽藍南側の東西幅が84mと判明した。主要伽藍に取り付く西門北側のD・E区からは溝状造構が確認できず、主要伽藍を巡る溝状造構はこの箇所まで延びないと判明した。

平成11年度の調査は、回廊が取り付く中門跡、主要伽藍に取り付く西門に相対する東門跡、そして塔跡の確認を目的とし調査を行なった。調査の結果、平成7年度にトレンチ調査を行なったA区を一辺10mに拡大し、中門跡の東側半分を検出した。中門も回廊同様最低3回の建て替えが行われていた。

平成12年度の調査は、寺城南東側に想定している塔跡の確認、主要伽藍に取り付く東門の確認及び金堂の掘込地業跡の立証、また、南門の確認などを目的として調査を行なった。調査の結果、東門及び金堂の掘込地業想定箇所は後世の擾乱のため断定するまでには至らなかった。塔跡想定箇所では遺構等は確認できなかったが、南門に関しては、南門に取り付く築地盤の基壇らしき粘土層が確認でき、調査区東側に南門が所在する可能性が高くなった。

本年度の調査は、寺域の北・西限及び寺域周辺遺跡の確認と、平成元年度に宮崎県教育委員会が調査を行い僧坊跡と推定されている箇所の再度確認を目的に調査を継続中である。現段階までに分かった結果としては、寺城端に関しては調査設定箇所などの問題から明確にできなかったが、僧坊跡ないし食堂跡とされている箇所では掘立柱建物の南側に新たな建物を想起させる柱穴群が確認できた。また、今回確認された建物跡も調査区内を南北に走る溝が埋没した後に築造されており、溝内の遺物から国分寺創建期には建立されていない可能性が高くなつた。

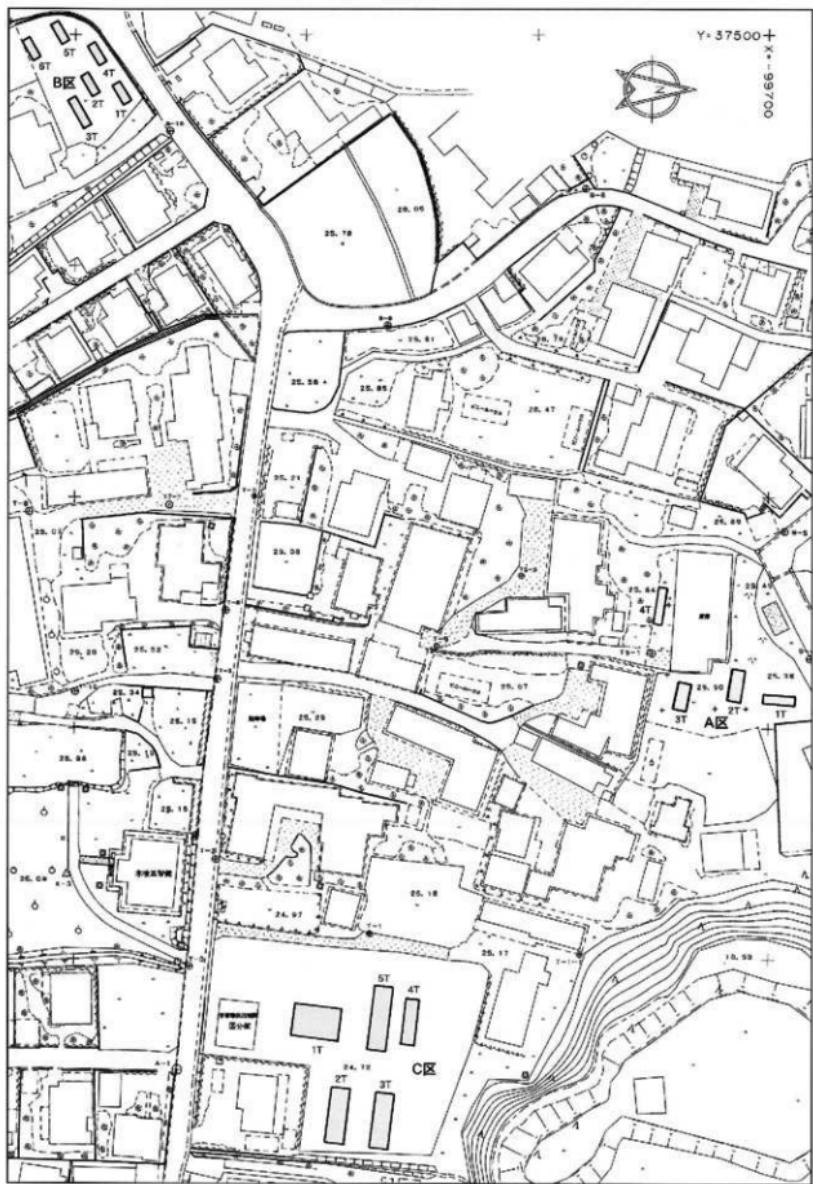


Fig. 7 日向国分寺跡現況平面及びトレンチ配置図 (1/1,000)

■ 本年度調査箇所

第2節. 遺構・遺物(図8~11)

《A区の調査》

A区は平成12年度の調査で確認された中門跡から復元した中軸線の西、国分寺跡の北端と推定されている辺りに寺域端を検出するという目的で第1~4トレンチを設定し調査を行った。

調査の結果、第1トレンチは表土から約40cm掘り下げた段階でアカホヤ火山灰層が確認され、遺構検出を行った。その結果、縄文早期の集石遺構と弥生時代の土坑が1基ずつ確認された。但し、これらは後世の畑造成により上部をかなり削平されており形状は明確にできなかった。

第2トレンチは表土から約50cm掘り下げた段階でアカホヤ火山灰層が確認され、遺構検出を行った。その結果、南北に延びる溝が2条確認されたが遺構の性格に関しては明確にできなかった。

第3トレンチは表土から約50cm掘り下げた段階でアカホヤ火山灰層が確認され、遺構検出を行った。その結果、トレンチ東端に深さが最低でも180cm程の溝が確認された。この溝には、かなり多くの上器片や瓦片が含まれていたが、現代のゴミ類も含まれていたことから国分寺跡に伴う遺構である可能性は低い。但し、この溝内に含まれていた瓦の中には瓦当面が無文であり、かなりしっかりした段階の軒平瓦片(Fig.8-3参考)も含まれていた。このようなことから、現在、畑になっている周辺に国分寺創建期頃の遺構が所在している可能性が高くなった。

第4トレンチは表土から約25cm掘り下げた段階でアカホヤ火山灰層が確認され、遺構検出を行った。その結果、ピットが数個確認されたが遺構の性格に関しては明確にできなかった。

A区から出土した遺物は、3点のみ記載させていただく。いずれも第3トレンチ東側溝から出土したものであり、近年の畑開墾時に周辺から出土した遺物をゴミ等と一緒に埋めたものである。1は今回分類を行った軒平瓦7類に該当する。全体の3/5が遺存しているが、外区周縁端に関しては不明である。復元幅は26.4cm程になると思われるが、周縁が遺存していないことから正確な径は明らかにできない。2は今回分類を行った丸瓦7類に該当する。丸瓦との接合部で割れているため、周縁の上部は明らかにできない。単弁?葉蓮華文で単弁中央は窟んでいる。内区は素文で内区周縁よりも若干窪む。復元形は19cm程である。3は今回分類を行った軒平瓦5類に該当する。復元幅は27cm程で四面布目痕、凸面は縦方向の平行条線叩きの跡を綺麗にナデ消してある。

《B区の調査》

B区は推定寺域の西側の現在、畑となっている箇所に6本のトレンチを設定し調査を行った。

調査の結果、調査区北側には以前、民家が所在していたことからかなり擾乱をうけており遺構等は確認されなかった。但し、調査区中央から南側にかけての第2・3トレンチ周辺は擾乱から免れていた。

第2トレンチは表土から約25cm掘り下げた段階でアカホヤ火山灰層が確認され、遺構検出を行った。その結果、直径30~80cm程の柱穴が5個確認され、中には30cm程の根石が置かれている柱穴も確認された。これらがどの時期のものであるかに関しては、遺物が出土せず明確にはできなかった。

第3トレンチは表土から約25cm掘り下げた段階でアカホヤ火山灰層が確認され、遺構検出を行った。その結果、アカホヤ火山灰上層の黒色土層が東側に向かって約40cm程の高低差をもち下っているが、この中にはコンテナ3箱分の上器片が含まれていた。これら土器に関しては、大半が土師器であり、奈良期まで上るようなものは含まれていないが平安期の所産である(Fig.8-4~8参考)。遺物の出土状態からみると、生活に用いた食器類を廃棄した可能性が高く、この辺りに国分寺と同時期の集落遺跡などが所在していた可能性が高い。

《C区の調査》

C区は平成元年度に宮崎県教育委員会が調査を行い、僧坊跡ないし食堂跡と推定されている箇所に設定した。上記の調査の折りには調査面積が狭かったこと、また、溝や東側柱穴列の性格が明確にされていないことなどの理由から再度遺構を確認する目的で調査を行った。調査面積は、柱間の長さを考慮すると1~2m程のトレンチでは狭小なことから第1~5トレンチを設定し、現在調査を継続中である。トレンチの規模は第1トレンチが7×10m、第2トレンチが4×12m、第3トレンチが4×12m、第4トレンチが3×10m、第5トレンチが4×14mである。但し、今後の調査に伴い規模拡大する可能性もある。

第1トレンチは平成元年度に宮崎県教育委員会が2時期の掘立柱建物を確認した南側にあたる。このトレンチの南側に直径35~90cm程の柱壠形がかなり密集して確認された。以前の調査時には調査を行っていない箇所であり、ここに新たな建物跡が所在していたことが予想される。但し、この建物がどのような性格のもののかに関しては、現段階では断定できない。

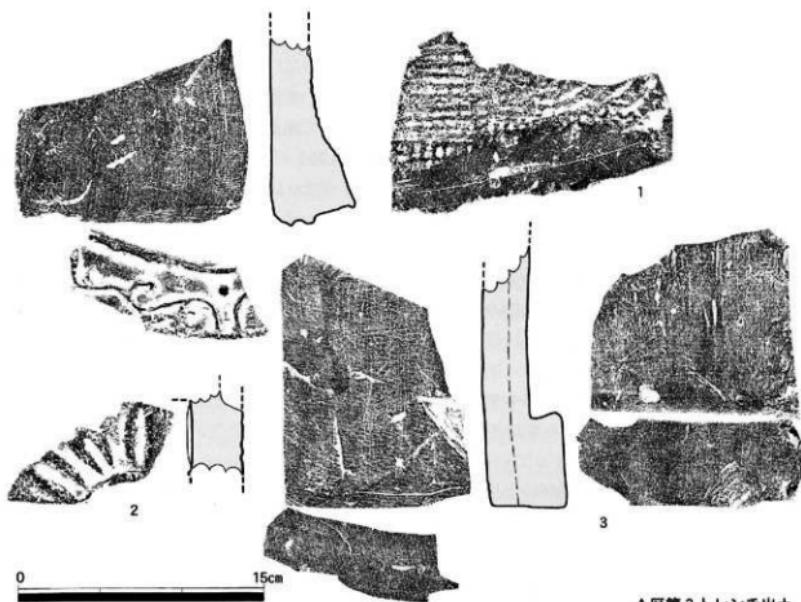
また、このトレンチの中央よりやや西側には幅80~120cm程の溝が南北に延びている。これは平成元年度調査の第6トレンチでも確認されており、若干蛇行している。この溝に伴う遺物として、単弁7葉蓮華文軒丸瓦が1点出土している。このトレンチで確認されている柱壠形は、溝埋没後に掘削されていることから、溝掘削時より後に築かれた建物と予想される。したがって、圓分寺創建期や最盛期に築かれたものではなく、それよりもかなり下った時期に築かれた可能性が高くなつた。今後、溝の年代に関しては、出土遺物から再度検討する必要性がある。

第2・3トレンチは調査区東側の南北端に設定した。ここは、平成元年度調査時に南北に延びる柱穴列が確認されている。当時の調査面積が狭かったことから、遺構の性格を明らかにする目的と、当時の第7トレンチの東端に幅約2.2mの南北溝が確認されたことから、どの辺りまで延びているのかなどの目的で調査を行つた。

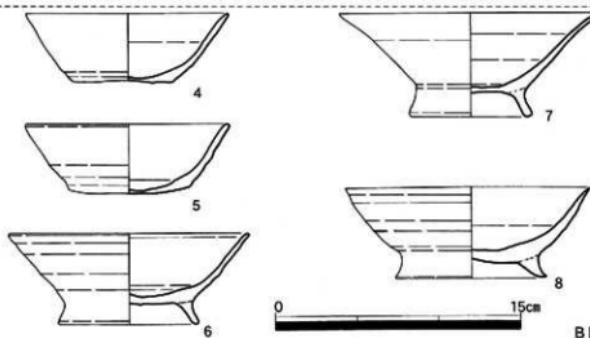
調査の結果、第3トレンチからも第2トレンチ(平成元年度第7トレンチ)同様の溝が確認できた。しかし、溝内に含まれる遺物に関しては近世の茶碗等もかなり含まれており、後世に掘削された溝であると判明した。

南北の柱穴列に関しては、第3トレンチの北側には延びず平成元年度確認されている箇所で終わり、第2トレンチでは、まだ南側に延びているようである。また、現段階では明確にできないが、北側に関しては、これから約15m行くと急坂になり、以前、池が所在していた場所になる。また、今回検出した最北端の柱穴(平成元年度確認の柱穴と同様)から東側に延びる柱穴列が確認されたことより寺域の北限を示す柱穴列の可能性が高い。

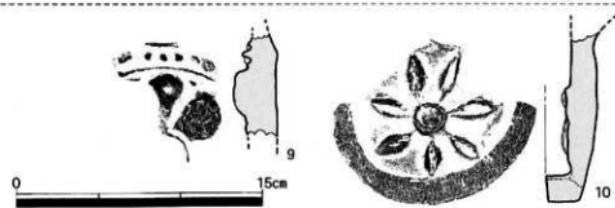
次にC区から出土した遺物は、まだ調査継続中であるため2点のみ記載させていただく。9は今回分類を行った軒丸瓦5b類に該当する。この瓦は、第3トレンチの東端の溝内から出土した。前記したように、この溝は近世の遺物と供に出土している。全体の1/4が遺存しているが、内区に関しては不明である。復元形は11.6cm程になるが、周縁が遺存していないことから正確な径は明らかにできない。10は今回分類を行った軒丸瓦7類に該当する。この瓦は、第1トレンチ南北溝上から出土した。この位置は畑耕作面との高低差が30cm程しかなく、元位置を保っているのか判断に悩むが、この溝の周辺にあまり遺物が確認されていないことから、溝に伴う瓦であろうと想定した。丸瓦との接合部で割れているため、周縁の上部は明らかにできない。単弁7葉蓮華文で単弁中央は窪んでいる。内区は素文で内区周縁より若干窪む。復元形は16.9cm程である。



A区第3トレンチ出土



B区第3トレンチ出土



C区第3トレンチ出土

Fig. 8 日向国分寺跡第7次出土遺物実測図 (1/3)

第3節 小結

本年度の日向国分寺跡の調査は現在も行っており、平成13年9月17日から平成14年3月末まで実施する予定である。

西都市教育委員会が国庫補助を請けて行う日向国分寺跡の調査は、平成7年度から行われており本年度で第7次になる。昨年度までの調査で平成7・8年度は主要伽藍を取り巻くと思われる溝状造構や金堂の推定堀込地業跡、平成9年度は主要伽藍に取り付く西門跡の確認、平成10年度は主要伽藍南東側の回廊跡が確認でき、最低でも3回の建て替えが行われていることが明らかになった。平成12年度の調査では中門も回廊同様、最低3回の建て替えが行われていることが判明した。1・2期目の建て替え時は回廊同様掘立柱建物であったが、3期目に建て替えられた中門は礎石建物となり規模も拡大し、回廊の外側を取り巻く溝が埋没した後に建立されていることなどが判明した。

昨年度の調査では塔跡の確認、主要伽藍に取り付く東門の確認及び金堂の掘込地業跡の立証、また、南門の確認などを目的とし調査を行った。調査の結果、主要伽藍に取り付く東門跡は擾乱が著しく、塔跡に関しても基壇と思われる遺構等は確認できなかった。また、金堂の掘込地業想定箇所に関しては、現在、墓地が周間に所在しており擾乱が著しく、礎石痕跡の確認や掘込地業跡であると断定するまでには至っていない。南門想定箇所に関しては、南門に取り付くと想定される築地塀の基壇らしき粘土層が確認できた。

本年度の調査は、寺域の北・西端及び寺域周辺遺跡の確認、また、平成元年度に宮崎県教育委員会が確認調査を行い僧坊跡ないし食堂跡と推定されている箇所及びその周辺の再度確認を目的に調査を継続中である。

現段階までに分かった結果としては、寺域端に関しては北・西端ともに宅地化がかなり進んでおり調査設定箇所の制限や後世の擾乱により遺構等を明確にすることはできなかった。しかし、AB区とともに平安期の上器・瓦片等は多く出土しており、周辺にはかなりの生活遺構が拡がっていることが明らかになった。

また、以前より僧坊跡ないし食堂跡とされているC区では、2時期の掘立柱建物の南側に新たな建物と予想させる柱穴群が確認できている。今回確認された建物跡は、その調査区内を南北に走る溝が埋没した後に建立されているとみられる。このことに関しては、溝内より出土した遺物に今回分類を行った軒丸瓦7類や凸面に横縄叩きの施された平瓦が含まれているため国分寺創建期には存在しない可能性が高くなった。

来年度の調査も今年度と同様に寺域端及び周辺遺跡の確認調査を中心に行っていく予定である。しかし、調査設定箇所の確保が宅地化などの理由で困難であることから、今後、どのように調査を行っていくかを検討する必要がある。

第V章 日向国分寺跡出土軒先瓦の分類

第1節 日向国分寺古瓦の研究史

日向国分寺跡の古瓦については、昭和36年に宮崎県教育委員会と九州大学が調査を行った際、小田富士雄氏によって詳細な検証が行われている(小田、1963)。氏の分類は、瓦当部の文様構成や形状、叩き手法等で軒丸瓦を8種類、軒平瓦を6種類に分類されている。また、平瓦・丸瓦を叩き文様から繩目叩文・格子目叩文・平行条線文・無文の4種類に分け、その中を細分されている。

その後、平成元年の試掘調査により出土した丸・平瓦を長津宗重氏が叩き目と凹面の布目痕の関係、また、それぞれの叩きに伴う面取りの部位について紹介し分類されている(長津、1991)。

今回の瓦分類に関しては、軒先瓦に限定し紹介する。軒先瓦分類は、ほぼ小田氏の分類に準拠するが、その後の調査で新たに分類できるものも出土しているため再度分類を行う。

日向国分寺跡の調査は上記したように昭和23年の日向考古調査団の調査に始まり、平成12年度までに9度の調査が行われてきた。しかし、いずれも広範囲の発掘調査ではなく、主要伽藍部及び寺域の確認調査が行われたのみである。したがって、これまでの調査では一括遺物としての古瓦の出土が大変少ない。このような理由から、今回は瓦当面の文様構成や頸部形状などによりセット関係を推定することに留める。

第2節 分類私論(図9・10)

ここでは、小田氏が昭和36年に調査された時点以降、出土瓦の量もかなり増えたことから、これらの資料を用いて細部を検証した結果、軒丸瓦を11類、軒平瓦を9類に分類し、その中を細分した。但し、大半は小田分類を踏襲する。

(軒丸瓦)

- 1類 小田氏の一類を充てるが蓮弁と珠文の配置、及び楔形小弁の変化で3種に細分する。
- 1a類 小田氏の一類とはほぼ同様である。小粒の珠文が十六珠あり、ほぼ蓮弁と楔形小弁に一致している。
- 1b類 1a類では珠文と蓮弁・楔形小弁が一致していたが、少しずつずれを生じている。
- 1c類 珠文と蓮弁との関係は1b類同様であるが、楔形小弁が省略されて蓮弁を囲む外界線にて表現されている。
- 2類 小田氏の二類を充てる。
- 3類 小田氏の三類を充てるが、蓮弁の形状と内区界線の太さで3種に細分する。
- 3a類 単弁11ないし12葉である。蓮弁の小弁が線状に深く窪んでいる。中房はやや太めの圓線で表され、蓮子は1+5の6個と思われる。
- 3b類 3a類の蓮弁の小弁表現が線から割り開いた形に変わり、これに伴い蓮弁の高さは低くなる。
- 3c類 蓮弁の表現は3b類と同様であるが、中房の圓線が大変細くなり高さも低くなる。
- 4類 小田氏の四類を充てる。
- 5類 小田氏の五類を充てるが蓮弁の数と珠文の数及び配置により3種に細分する。
- 5a類 小田氏の五類を充てる。
- 5b類 5a類に近いが、蓮弁の数が8葉ほどである。

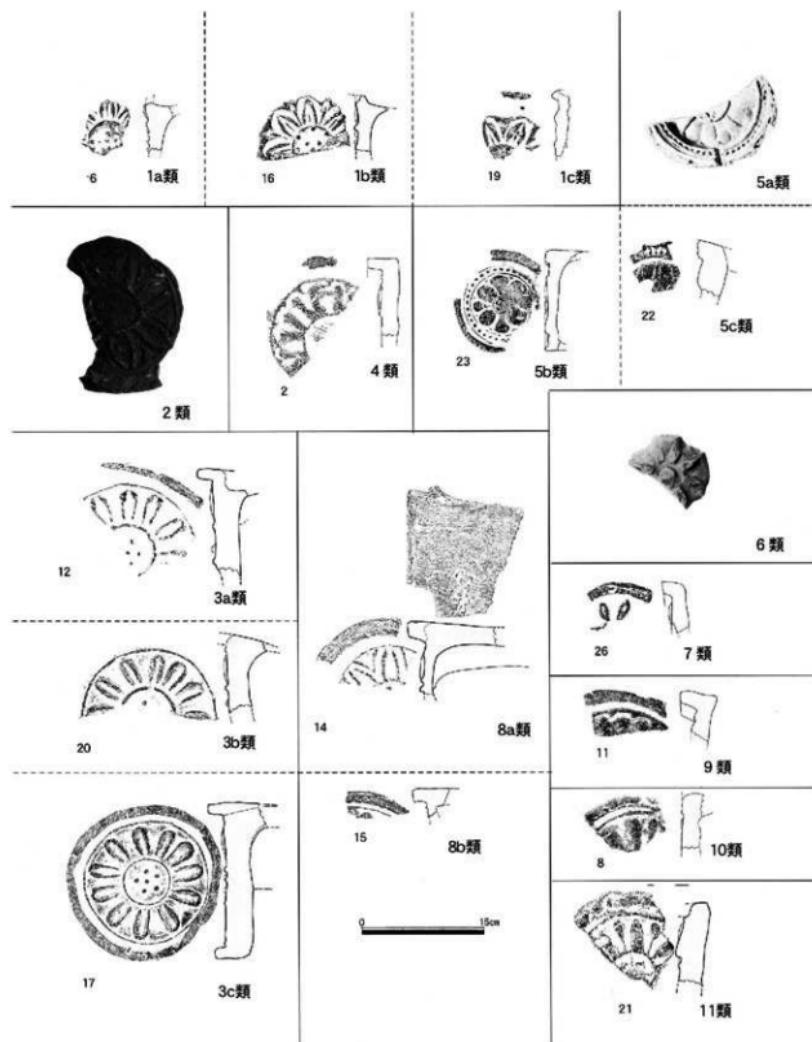


Fig. 9 日向国分寺跡出土軒丸瓦分類 (1/5)

※2・5a・6類に関しては約1/5である。

- 5c類 5a・b類同様であるが、蓮弁を線刻に表現したものに変化するため、不鮮明である。
- 6類 当初、小田氏の六類を充てていたが、出土地点が日向国分寺跡のものではないことが明らかになったことから、今回、小田氏の七類を充てる。
- 7類 小田氏の八類を充てる。
- 8a類 単弁で7・8葉である。蓮弁の表現は1c類に近似するが、外区内側の圓線内で蓮弁が収まらず、圓線で切られた様な形を探る。また、1類と大きく異なるのは珠文の省略である。
- 8b類 蓮弁の表現等は8a類同様であるが、蓮弁帯の外が素弁でかなり薄い作りである。
- 9類 蓼華文複弁と思われる。蓮弁がかなり低く摩耗しているので詳細は不明であるが、かなり蓮弁の表現が簡素化している。
- 10類 単弁で12葉程である。中房は圓線で表され蓮子は不明である。蓮弁は長く、先が丸まる。
- 11類 単弁8葉程である。弁間に子葉が配され蓮弁2つに対して1つ割り付けられる。中房には2つの蓮子が認められるが詳細は不明である。また、中房内にも界線が配され蓮子を区切ってある。

(軒平瓦)

- 1類 小田氏の一類を充てるが氏の指摘でもあるように瓦当端部の面取りの有無で2種に細分する。
- 1a類 小田氏の一類を充てる。
- 1b類 小田氏も指摘されているが、瓦両側端が内傾する。この内傾しているものに関しては、桶から切ったままの状態で面取りを行ってないための所産かもしれない。
- 2類 小田氏の二類を充てるが、3種に細分する。
- 2a類 小田氏の二類を充てる。
- 2b類 2a類と比較すると瓦下部の圓線がかなり細くなる。したがって、瓦当上下幅もかなり狭くなる。
- 2c類 2b類と近似しているが珠文が大きく、珠文の全ての配置は不明であるが大きな珠文が瓦当端に配される。図に提示したものは瓦当端を丸く面取りしているが、この類のものが全て面取りされているかは不明である。
- 3類 小田氏の三類を充てる。
- 4類 小田氏の四類を充てる。
- 5類 小田氏の五類を充てる。
- 6類 小田氏の六類を充てる。
- 7類 均整唐草文で2a類の藤手様の相対する中心飾と子葉が一緒になり、あまり波行の強くない唐草が左右に伸びる。珠文は圓線の内側にあり中心飾の中心上部に1つを配する。その他の珠文は子葉の先に蕾状に付き、珠文としての意味をなくす。
- 8類 均整唐草文で7類と近いが、子葉の先の蕾が消え、中心飾及び子葉が瓦当面全域に拡がる。また、中心飾や子葉は7類と比較するとかなり肉太になる。
- 9類 均整唐草文と思われるが、唐草の波行がかなり弱く、一本の子葉が横に長い。子葉の先には7類同様珠文が蕾状に付く。圓線は瓦下部にのみ痕跡を残す。

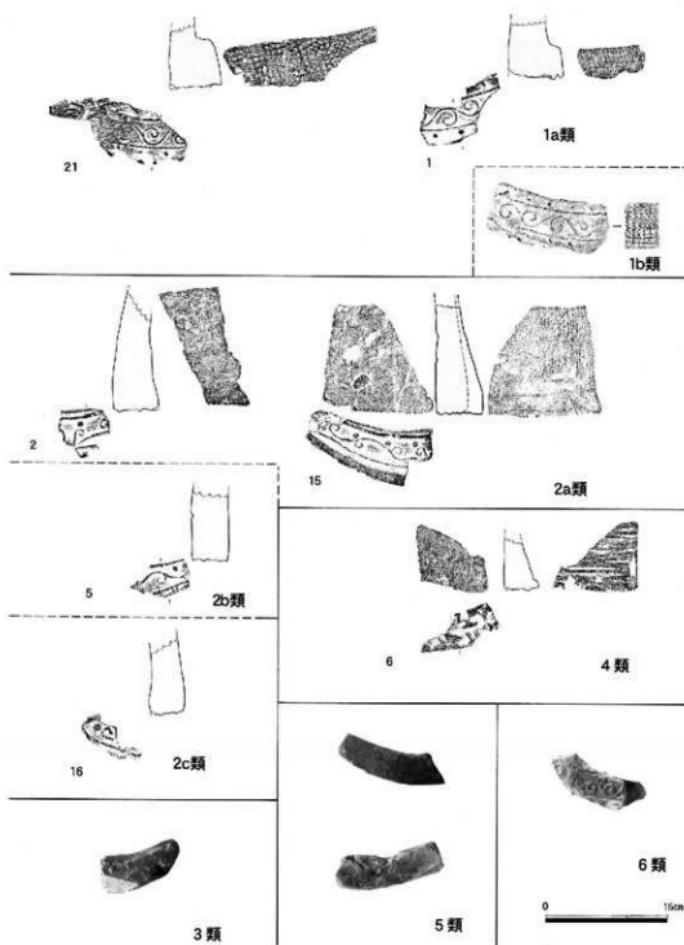


Fig. 10 日向国分寺跡出土軒平瓦分類 (1/5)

※3・5・6類に関しては約1/5である。

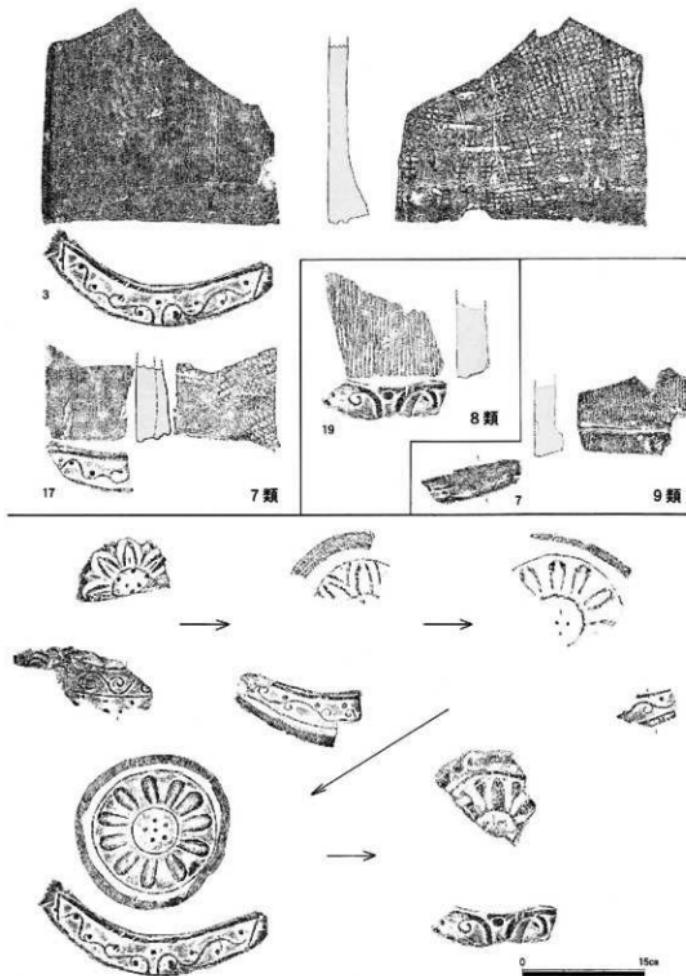


Fig. 11 日向国分寺跡出土軒先瓦のセット関係 (1/5)

第3節. 日向国分寺出土軒先瓦のセット関係(図11-12)

(創建期)軒丸瓦1a・b・c類、軒平瓦1a・b類

創建期の軒先瓦は小田氏も指摘されているように、軒丸瓦1類と軒平瓦1類がセットをなすと思われる。軒丸瓦の瓦当文様の細かな変化とは異なり、軒平瓦は1a・1b類での面取りの差がある程度ある。このセットは国分寺創建瓦と思われ8世紀後葉～末頃の時期が充てられる。

(第2期)軒丸瓦2類、5a・b類、8b類、軒平瓦5類

この時期には3類4種の軒丸瓦と1類の軒平瓦が用いられたと想定される。今回、軒丸瓦2類と軒丸瓦8b類を別類にした。これは、筆者自身が昭和36年資料を一部しか実査できなく、報告書の写真からのみの判断であることから別類にした。但し、細かな差があるとしても同類の範疇であろう。しかし、軒丸瓦5類では全く様相が異なる。小田氏は、この瓦の周縁が高くなり、小珠文の密に配されることから平安前～中頃の時期を充てられている。筆者もそれに従う。一方、軒平瓦3類に関しては小田氏が指摘されているように、瓦当部と平瓦部が直角で顎形状が深顎であることから創建期に近い時期の所産であろう。但し、無文の瓦当が突如、軒平瓦1類に取って代わると考えられないことから、第3期までは軒平瓦1類が何らかの変化を得るかもしれないが軒平瓦5類と併存していると想定する。このセットは国分寺第2期の瓦と思われ9c初頭頃の時期が充てられる。

(第3期)軒丸瓦8a類、5c類、軒平瓦2a類

この時期は2類2種の軒丸瓦と1類1種の軒平瓦が用いられたと推定される。この2類2種の軒丸瓦は第2期の軒丸瓦の変形形態であると思われ、8a類は蓮弁が内区圓線に収まらず形状的には蓮弁が圓線で切られたような配置を示す。また、5c類に関しては5b類の小珠文が周縁に移動し、蓮弁の文様が線刻されたような簡略化が認められる。一方、軒平瓦2a類は瓦當面が上面と直角から鈍角への移行期であり、顎の形状が段顎から撫顎に変わる段階である。瓦当文様は蕨手文の中心飾から左右に唐草の子葉が3つに分岐する。1類で珠文が内区の外側に配されていたのに対し、内区の内側へ移動し子葉の分岐する箇所に配される。このセットは国分寺第3期の瓦と思われ9c前葉頃の時期が充てられる。

(第4期)軒丸瓦3a・b・c類、4類、軒平瓦2b・c類、7類

この時期は2類4種の軒丸瓦と2類3種の軒平瓦が用いられたと推定される。軒丸瓦は中房に5個の蓮子が配され、單弁11ないし12葉の軒丸瓦3類に代表される。また、これと同時期に複弁7葉と思われるものも採用される。この時期以前の複弁軒丸瓦は出土しておらず、今後出土するのか、それともこの時期に違うルートで導入されたのかは今後の課題である。一方、軒平瓦に関しては2a類から変化した2b・2c類が用いられるようになる。また、それらの瓦当文様が変化して珠文と子葉が一緒になり蓄状になった形へと変化する。このセットは国分寺第4期の瓦と思われ9c中～後葉頃の時期が充てられる。

(第5期)軒丸9類、10類、11類、軒平3類、4類、8類、9類

この時期は3類の軒丸瓦と4類の軒平瓦が用いられたと推定される。軒丸瓦は3類の蓮弁がそれまでとは逆に盛り上がり素文の蓮弁となる。また、蓮弁の間には外側に向かって膨らむ形の蓮弁ともいうべきものが交互に配される11類や11類がより簡素化された10類が採用される。また、4類の複弁のものがより簡素化されたと思われるものも採用される。一方、軒平瓦は9類のような子葉が偏平で左右に長く延びたものや8類のように7類が変化して瓦當全体に7類の内区の文様だけが肉太に表現されたもの、また4類のようにそれまでの文様と逆転し唐草文が刻印されたものなどが採用される。このセットは国分寺第4期の瓦と思われ9c後葉～末頃の時期が充てられる。

	軒丸瓦	軒平瓦
創建期 8c後 ～ 8c末	<p>6 1a類 16 1b類 19 1c類</p>	<p>21 1 1a類 1b類</p>
第2期 9c初	<p>2類 15 8b類 5a類 23 5b類</p>	<p>5類</p>
第3期 9c前	<p>14 8a類 22 5c類</p>	<p>15 2 2a類</p>
第4期 9c中	<p>12 3a類 20 3b類 2 4類</p>	<p>5 2b類 16 2c類 3 7類</p>
第5期 9c後 ～ 9c末	<p>17 3c類 21 11類 8 10類 11 9類</p>	<p>3類 7 9類 19 8類 6 4類</p>

Fig. 12 日向国分寺跡軒先瓦の型式変遷 (1/10)

軒丸瓦

No.	調査年度	出土地点	分類	数量	建物との位置
1	KBZ(平成7年度)	I-A区 1トレンチ SE11	3b	1	中門構内
2		タ 2トレンチ	4	1	中門
3		タ 11トレンチ	1	1	中門
4		タ	8b	1	中門
5		I-B区 10トレンチ	3a	1	金堂東側
6		タ 2トレンチ SC2	1a	1	金堂東側上坑2内
7		タ SC2	1b	1	金堂東側土坑2内
8		タ 一括	10	1	金堂東側上坑2内
9		不明	1	2	不明
10	KBJ2(平成8年度)	II 3トレンチ	3?	1	金堂北東側
11		タ	9	1	金堂北東側
12	KBJ3(平成9年度)	A区 SE002	3a	1	主要伽藍西門構内
13		タ	3b	1	主要伽藍西門構内
14		タ	8a	2	主要伽藍西門構内
15		タ	8b	1	主要伽藍西門構内
16	KBJ5(平成11年度)	A区	1b	1	中門柱穴内
17		タ SE002	3c	1	中門構内
18		B区 3トレンチ	3b	1	中門南東
19		C区 一括	1c	1	金堂北東側
20		タ SR001	3b	3	金堂北東側
21		タ SR001	11	2	金堂北東側
22		タ SR001下層	5c	1	金堂北東側
23	KBJ6(平成12年度)	A区 1トレンチ	5b	1	中門
24	KBJ(6)(平成12年度に表採)	中間 一括	1	1	中門付近
25		タ	1b	1	中門付近
26		タ	7	1	中門付近

軒平瓦

No.	調査年度	出土地点	分類	数量	建物との位置
1	平成7年度以前の表採	No.57	1a	1	表採
2	KBZ(平成7年度)	SE-1	2a	1	不明
3		I-A区 1トレンチ SE11	7	1	中門構内
4		I-B区 2トレンチ SC2	2a	1	金堂東側土坑2内
5		タ	2b	1	金堂東側十坑2内
6		タ	4	1	金堂東側土坑2内
7		I-C区 2トレンチ SC2	9	1	主要伽藍南東隅構内
8		I-D区 1トレンチ SC2	1a	1	北西土壤南側
9		一括	4	1	不明
10		不明	2a	1	不明
11	KBJ2(平成8年度)	不明	1	1	不明
12	KBJ4(平成10年度)	A区	1a	1	阿庭南東
13		一括	1a	1	不明
14	KBJ5(平成11年度)	A区 No.902	1a	1	中門構内
15		B区 3トレンチ SE001	2a	1	中門南東
16		C区 1トレンチ	2b	1	金堂北東
17		タ SE003	7	1	金堂北東
18		タ SR001	1a	1	金堂北東
19		タ	8	1	金堂北東
20	KBJ6(平成12年度)	A区 1トレンチ	1a	1	中門
21	KBJ(6)(平成12年度に表採)	中門付近一括	1a	2	中門

*この表は、昭和36年測定時（九州大学・宮崎県教委）出土遺物に関しては含まない。また、現時点で西都市所有分のみである。No.は図の番号と一致する。

Tab. 1 日向国分寺跡出土軒先瓦一覧

第4節.まとめと今後の課題

今年度までの調査結果を踏まえ、今回、日向国分寺跡出土の軒先瓦の分類及び編年作業を行った。但し、今回の分類及び編年は、あくまでも試案であり、今後の調査成果で大幅に追加及び修正される可能性があることを断っておきたい。

分類を行った結果、軒丸瓦を11類18種、軒平瓦を9類12種に分類することが可能であった。分類の手段は基本的には瓦当文様を重視し、製作技法や法量を用いて検討した。種に関しては、工人の癖等が反映している可能性も残るため、どこまでの細分が必要なのかに関しては疑問も残るが、今回は細かく細分を行った。

次に時期比定に関しては、国分寺建立の詔以降、「続日本紀」に天平勝宝元(756)年に日向が表されるまでの約15年間の間に1期を充て、軒丸瓦8類が9世紀中～後期頃の上師器と共に伴する例が多いことから第4期に想定したが、他のものに関しては瓦当文様や法量などから年代を与えている。今回、用いた資料の中には一括遺物のみでなく表採等も含まれることから、今後、時期を確定するには資料の増加や広範囲の発掘調査を行っていく中でまとった資料を抽出し、再度検討していかなければならない。

それ以外の課題としては、瓦の製作技法及び時期比定などを再度検討する必要性がある。今回、丸・平瓦を整理するに伴い、桶巻き作りで製作したものを裁断した後に、整形台で叩き直しを施したと思われるような例もある。また、平瓦一枚作りにより製作されたと予想される瓦も含まれております。今後、これら瓦の詳細な検証を行っていかなければならぬ。

また、日向国分寺創建期の瓦がどのような背景及びルートを辿って持ち込まれたのかという課題もある。小田富士雄氏は昭和36年の調査報告で、筑後から肥後、そして日向への軒先瓦の導入を想定されている。軒丸瓦が単弁であること、創建期に軒平瓦に見られる偏行唐草文やその後の均整唐草文などから推察しても、このルートの可能性は高い。但し、少量ではあるが複弁の軒丸瓦も出土していることから、他地域との比較や今後の調査による資料の増加でより明確になることと思われる。

また、日向地方には古代瓦窯が佐土原町の下村瓦窯でしか確認されておらず、今後、日向国分寺瓦専業窯を確認することは必要不可欠である。下村窯跡は一部の窯しか調査されていないが、日向国分寺の瓦が直線で約8.4km離れた下村窯跡からの供給のみとは想定し難い。また、下村窯跡で出土している瓦は、ほとんどが凸面横粗繩目叩きであり、国分寺創建瓦の凸面に精繩目叩きや格子目叩きが施されたタイプは現段階までに出土していない。したがって、今後、国分寺跡周辺に創建期の窯跡が確認されることが想定される。

今後、このような課題を解決していくことにより、日向国分寺使用瓦や瓦工人集団の全貌が明らかになっていくことであろう。

※参考文献は第II章(註)を参照

図 版
(PLATES)

- 西都原地区遺跡 -

P L. 1



1. 西都原地区遺跡遠景



2. トレンチ調査状況(第68地点)



3. アカホヤ火山灰下層検出状況

- 西都原地区遺跡 -

P L. 2



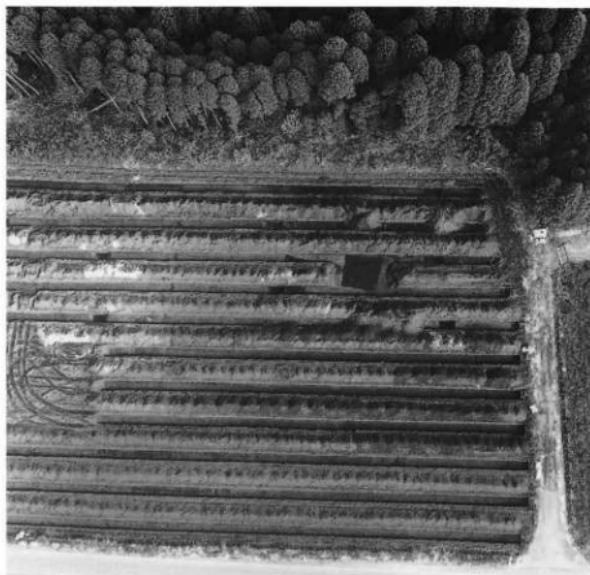
4. 西都原地区遺跡近景



5. トレンチ調査状況(第58地点)



6. トレンチ調査状況(第62地点)



7. トレンチ調査状況(第65地点)



8. 遺構検出状況(第65地点)



9. 住居跡検出状況①(第60地点)



10. 住居跡検出状況②(第60地点)



11. 住居跡検出状況③(第62地点)

- 西都原地区遺跡 -

P L. 5



第60地点 住居跡出土遺物



①



④

第62地点 住居跡出土遺物

12. 西都原地区遺跡出土遺物



13. A区第1トレンチ遺構検出状況(南より)



14. A区第2トレンチ遺構検出状況(北東より)



15. A区第4トレンチ遺構検出状況(東より)



16. B区第2トレンチ遺構検出状況(東より)



17. B区第3トレンチ遺物出土状況(東より)

— 日向国分寺跡第7次 —

P L. 7



18. B区第3トレンチ完掘状況(東より)



19. C区第1トレンチ遺構検出状況(南東より)



20. C区第1トレンチ遺構検出状況(北西より)



22. C区第3トレンチ東側溝削削状況(南東より)

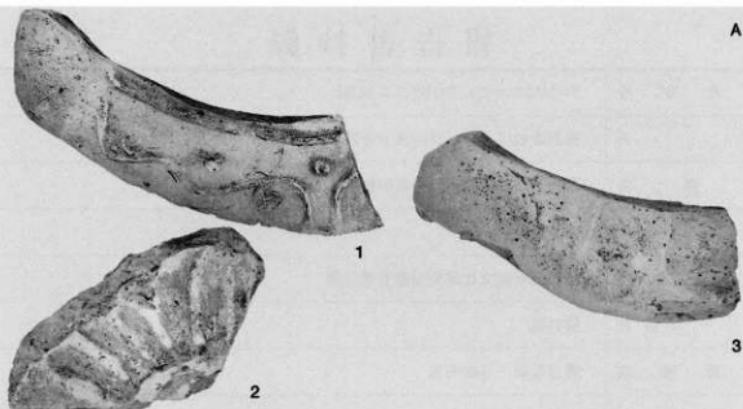


21. C区第3トレンチ遺構検出状況(西より)

— 日向国分寺跡第7次 —

P.L. 8

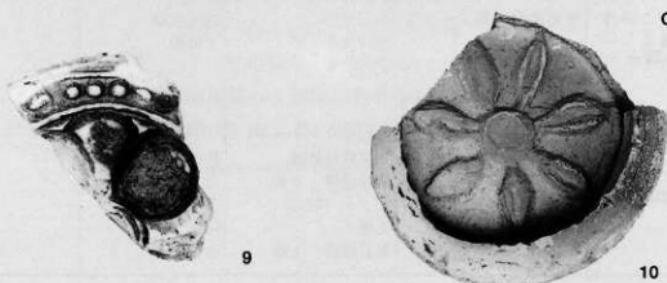
A区



B区



C区



23. 日向国分寺跡第7次出土遺物

報告書抄録

ふりがな	さいとばるちくいせき・ひゅうがにくぶんじあと					
書名	西都原地区遺跡・日向国分寺跡					
副書名	市内遺跡発掘調査概要報告書					
卷次	第7集					
シリーズ名	西都市埋蔵文化財発掘調査報告書					
シリーズ番号	第31集					
編著者名	養方政幾・笠瀬明宏					
編集機関	西都市教育委員会					
所在地	〒881-8501 宮崎県西都市聖陵町2丁目1番地 TEL 0983-43-1111					
発行年月日	西暦 2002年3月29日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積 (m ²)
		市町村 遺跡番号				
さいとばるちくいせき 西都原地区遺跡	みやざきけんさいとし 宮崎県西都市 おおさみやけいはるわき 大字三宅寺原脇他	1026 1029	X = -99000.00 X = -97000.00	Y = 36000.00 Y = 36800.00	20010822 20011214	15,000
ひゅうがにくぶんじあと 日向国分寺跡	みやざきけんさいとし 宮崎県西都市 おおさみやけいあこくぶ 大字三宅字国分	1008	X = -99650.00 X = -99900.00	Y = 37500.00 Y = 37750.00	20010917 20020329	400
調査原因	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項	
たばこ耕作 犬地返しに 伴う調査	生活遺構	绳文～古墳	集石遺構 竪穴式住居跡	弥生土器 土師器		
遺跡所在確 認に伴う確 認調査	国分寺 生活遺構	奈良～平安 绳文～	掘立柱建物跡 溝状遺構 3条 ピット（柱穴） 土壤？ 集石遺構 1基	軒平瓦片 丸・平瓦片 土師・須恵器片 陶磁器片 弥生土器		

「西都市埋蔵文化財発掘調査報告書」第31集

「市内遺跡発掘調査概要報告書」VI

西都原地区遺跡・日向国分寺跡

平成14年3月29日発行

編集発行 西都市教育委員会

印刷所 イマイ印刷

